

能登半島におけるローカル・ノレッジと専門知の協働を目指して

博士課程学生 (15日/30日)

- 関西学院大学博士課程後期課程1年
- 専門：科学社会学/災害社会学
- 修士論文：福島県双葉町

放射能汚染後のまちづくりにおける専門知の役割とは
——双葉町の復興まちづくりでの放射線に関する知識と住民参加の関係——

RRセンター研究員 (15日/30日)

- 東北大学時代に被災地ボランティア活動
→2024/02～ 能登の集落支援活動に参加
- 2025/04～ RRセンター研究員
- 建築士団体と協力して集落の住宅状況マップを作成するなど、集落内意思決定を支援

➡**脱文脈化された一般的な視点での復興像と個人の意思決定にギャップがある？**

(自然・文化・歴史あるいは集約化 ↔ 「子や孫に迷惑をかけない」「いずれ人がいなくなる集落」)

小原直将 (研究員)

A. 能登半島に関わる専門知について (科学社会学)

- **RRセンターの地震後の動きの整理と検証/過去の被災現地大学との比較**
→ 専門知を有しながらローカルノレッジにも理解がある現地大学の災害後の役割とは？
- **能登に関わる専門家の動き、入り方に関する研究 (量的&質的調査)**
→ 災害前の能登半島との関わりは？
→ 専門領域への貢献と被災現地への入り方との関係は？
→ 復興像をどのように描いているのか？

B. 能登半島におけるローカルノレッジについて (科学社会学 + 災害社会学)

① 専門家が関わっていない地域 (+ 支援)

- 仮設住宅の分布から見る集落集約化の現状
- 集落外居住者の元集落との関わりは？
- 地域的特徴は？

② 専門家が関わっている地域

- 仮設住宅の分布から見る集落集約化の現状
- 関与の経緯と地域的特徴は？
- 関与によって与えた影響は？

専門家はなぜ、どのように被災地に関わるのか
→ 専門知/ローカルノレッジはどこですれ違い、互いにどんな役割を果たせるのか